

| | | | | |
|-----------------------|--------------|-----|--------------------------|--|
| 4-10 | | 主題 | 参加者全員が満足できる創作活動の工夫 | |
| アクティビティ | | 副題 | 意欲と自信を取り戻すために | |
| 創作活動 | | | | |
| 研究期間 | 36ヵ月 | 事業所 | ゆとりえデイサービスセンター | |
| 発表者：大田節子 | | | アドバイザー： | |
| 共同研究者：山崎奈津江、鈴木町子、賀川真美 | | | | |
| 電話 | 0422-72-0312 | メール | yutorieday@parkciy.ne.jp | |
| FAX | 0422-72-0321 | URL | | |

| | |
|-------------------|---|
| 今回発表の事業他所やサービスの紹介 | ゆとりえは武蔵野市と杉並区との境にあり、静かな住宅地にありながら近隣にスーパーや公園、保育園があるという恵まれた環境にあります。デイサービス35名の他、特養30名、ショートステイ2名、在宅介護支援センター（地域包括センターランチ）を併設しています。デイサービスの平均要介護度は2.45です。 |
|-------------------|---|

| |
|--|
| <p>《研究前の状況と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> 週に1回の午後の創作活動は、4～5名で小物作り（自分の作品づくり）から始まった。制作が得意な方が参加する活動であった。認知症の方や細かい作業が難しい方が参加出来る活動ではなかった。 次第に今までできたことが難しくなった方や認知症の方も増え、これまでのような活動では収まらなくなった。どなたでも参加出来る活動が必要と考え、「制作が得意な方の活動」ではなく、物作りに興味のある方はどなたでも入れる活動に変えていくこととなった。 20名ほどに人数がふくらみ、認知症が進んだ方でも手先がうまく使えなくなった方でも、全員で楽しみながら作品を作るためにはどうしていったらよいか課題となった。 |
|--|

| |
|---|
| <p>《研究の目標と期待する成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> 大人数になろうと全員ができること（役割）を見つけられる→自分自身がきちんと参加できる、達成感を持ってもらうことを目的とする。 認知症の方や手先がうまく使えなくなった方など、どんなハンディがあろうと、その方が持つ残存能力を最大限に使い、それぞれに役割を持ってもらえる。作り上げた充実感や達成感をみんな味わってもらえる。 どんな方でも持つ、「きれい」と感じる心や色を選ぶ力や感性を活かし活動につなげていく。 作り上げた作品を飾り、周りの方に評価してもらい、個々の自信へとつなげられる。 |
|---|

《具体的な取り組みの内容》

- 年間の予定を大枠で年度初めに決定。【毎月の季節に応じたカレンダー作り（共同作品）、その時のテーマに沿ったタペストリー作り（共同作品）、その合間に個別の作品作り（小物作り）。】作品の準備も必要のために月の最終週は創作ではなく映画鑑賞の日とした。その時間はボランティアの協力を得て作品の枠作りなどの下準備の時間にした。
- タペストリーを作る時、どなたにでも完成した作品のイメージを持てるように工夫。【イメージ作りをお手伝いする。】
- 素材の工夫。【大人の作品に仕上げる。】
- グループ分けの工夫。【最初は皆で同じものを制作する。得意分野に参加していただく。切る、貼る、色選びなど。】
- 利用者の意見を取り入れた作品作り。【色や配置など、自分の思いが入った作品に仕上げる。】
- 職員だけでは足りない部分は積極的にボランティアの力も借りた。【ヒントを得る、別の視点からの意見を取り入れる。】
- 担当職員は3人、役割分担しお互いに評価し合い、良い作品作りに努めた。

《取り組みの結果と評価》

- 良い素材を使うことで布や柄選びなど利用者の目も肥えていき作品作りの自信につながった。
- 全員の方が関わる共同作品が作られ、それぞれの方が作品に愛着を持てた。認知症で忘れてしまう方にも作品を介して語りかけ、ほころんだ笑顔が見られた。手を掛けた作品を作り上げ評価されることで、自信回復につながった。
- 認知症や麻痺などそれぞれのハンディに対し、本人に合った「手伝い加減」が異なり配慮が必要だった。
- 職員も経験を積み作品作りにイメージが持てた。利用者として作り上げ利用者の満足した様子に接し同じように達成感を得られ、自信につながった。

《まとめ》

認知症がある方も共に行い、得意な方がうまく作業のすすまない方に教える、手伝うといった場面もあった。会の仲間として皆さんが関わり、会の中では認知症が緩和されることもあった。

作品の出来栄だけでなく、どれだけ個々が作品に関われるかで満足度が異なった。この活動を通し職員も、作品作りについて考える良い機会となった。

《提案と発信》

創作活動とは、手が動く方がもの作りをするという活動ということだけでなくその方の残存能力を発見し感性を引き出す場にもなると感じた。
共同作品を作ることを通しお互いが協力し合い、認め合い、失くしていた自信を取り戻し、いきいきとされる様子に接することができた。今後も、工夫を重ね、皆さんが納得される作品を考えていきたい。

【メモ欄】